た[6]。このように、羅州の地主比率が全羅道の平均より低いのに対し、小作地の比率は全羅道の平均を上回っていることから、羅州に大地主が多く存在したことがわかる。日帝時期の羅州の大地主は古くから郷村に居住する一部の士族勢力や主に羅州邑内にいた郷吏出身勢力、そして日本人地主であった。

ところが、1930 年代初めからほぼ同時に施行された栄山江改修工事と多時水利組合事業によってこの地域の農業環境は激変した。多時面の水利組合地区では土地改良と農事改良事業は問題なく統合できたが、収穫量に比べ過重な水利組合費が賦課された。その結果、1930 ～ 1945 年間に 10 町歩以上の地主層が所有する農地面積が 3％ほど増加する傾向を示したが、朝鮮人地主の所有面積はむしろ 83.2 町歩から 27.7 町歩へと急減した。それほどではなかったとはいえ、日本人地主層も同じ傾向を示した。その一方、日本人の株式会社を中心に土地の集積が進み、植民地地主制が 30 年代にも依然として強固に維持された。このような現象は地方有力者の財産規模が縮小したことを意味するもので、実際に地方有力者の影響力も減っていった。

2　韓末の羅州郷吏層

（1）民乱と東学農民戦争

1862 年に三南地方を巻き込んだ民乱は、その後の一時収束するものの、開港以後、再燃した。1860 年代には「民乱が起こらない村はない」というほど頻発した。とりわけ羅州では 1880 年代に入り、「羅擾十年」ともいわれるほど民乱が頻繁に起こり、1889 年からは 3 年連続で民乱が発生した[7]。

1889 年に起こった民乱の端緒となったのは、当時の営将の鄭東顯であった。彼の虐政に耐え切れず、民人が立ち上がったのである。この時に民乱に加担した村は 38 カ面に及んだ。事実上、羅州全体で起こった大規模な民乱であった[8]。しかし、1889 年の民乱の後にも、官吏の腐敗や無能のせいで民乱は 3 年間絶えることがなかった。1891 年には大規模な民乱が長期にわたって続き、民乱に加担した人々も 1000 人に達した。そのような中、1891 年 7 月、暗行御史の李冕相が事態を聞いて駆けつけ、3 回にわたって直接宣諭してようやく解散させるに至る。だが、わずか数日後に民人は再び立ち上がった。乱民は槍で武装し官庁へ討ち入って牧使を脅して吏郷を選任し、各種の帳簿を調べて節目も定めた。これを受けて、暗行御史の李冕相は 10 月 11 日に再び羅州に行き、直接に民乱を鎮圧し、ようやく乱民を解散させることができた。

長期間の民乱によって羅州は以前よりも疲弊した。これに対して李冕相は「邑不邑民不民」になってしまったと嘆いた。長期にわたって頻発した民乱、とりわけ 1891 年の民乱は羅州地域における郷吏層を政治的に苦しい立場に追い込んだ。民乱の結果、羅州の吏校

6　『全南事情志』。
7　「湖南肅啓草」『各司謄録』54、99 頁、113 頁。
8　「湖南肅啓草」『各司謄録』54、109 頁、122 ～ 123 頁。

層は民人や朝廷から奸郷として目を付けられた。このような背景もあり、1891 年の民乱が静まったわずか 2 年ほど後に起こった東学農民戦争は、羅州の郷吏層にとって強い危機感を抱かせるのに充分であった。

1894 年に東学農民戦争が勃発した時、農民軍は全羅道全域を占領したも同然であったが、羅州だけは占拠できなかった。農民戦争が勃発するやいなや、羅州では強力な守城軍が組織され、農民軍の攻撃に激しく抗戦した。第 2 次戦争期には湖南招討営が設置され、羅州をはじめ、南平・康津・長興・霊巌・務安にまで進軍し、この地域の農民軍を鎮圧するのに重大な役割を果たした。

羅州城の守城軍が組織されたのは 4 月であった。牧使の閔鍾烈は都統将として戸長の鄭台完、都衛将に吏房の孫商文、中軍将に金聲振、統察に退校の金蒼均、別将に朴根郁、文洛三、朴允七をそれぞれ選任した。その他の別将として、別哨、参謀、書記、偵探、都訓導、千摠、把摠を選任し、責任者総数は 68 名に及んだ[9]。守城軍の主要幹部に任命された人々のほとんどが羅州を代表する郷吏家門の出身であり、またそのほとんどが互いに通婚関係を結ぶなど、緊密な紐帯を持っていた[10]。1894 年 10 月以後にも都統将に戸長の鄭錫珍（鄭台完）、後軍将に金蒼均、攔後別将に朴在九（求）などが重任され[11]、彼らは守城軍に必要な財政も支援した[12]。一方、郷吏層は農民軍との戦いにおいても守城軍の抗戦を督励しながら戦闘を主導した。また守城軍の幹部も連名で通文を回して儒林に義挙を要請した。これが功を奏し、儒林をはじめ羅州の各村から民兵が守城軍に加わることになった[13]。農民戦争以後、守城の功で軍功録に入録された人物の 3 分の 2 ほどが吏校層であった。

目を引くのは、1891 年の民乱では地域住民からの非難が郷吏層に集中し、朝廷からも奸郷と目されたという点である。そのために 1891 年の民乱以後、地域社会における彼らの立場は少なからず肩身の狭いものとなった。羅州の郷吏層が守城軍の中心的な役割を果たしたのも、1890 年前後の民乱の過程で地域社会の民衆から激しい非難を浴び、打倒の対象であることが露わになったからである。その一方、全羅道全域が農民軍によって占領されたかのごとき状態で、城のすぐそばまで農民軍が迫っていた当時の急迫した状況の中で、郷吏層が主導した守城軍の活動がスムーズに展開したことは特記すべきである。それには、普段異族とはもちろんのこと、同族間においても郷村社会の主導権をめぐって緊張・対立し続けた彼らが集団利益に反する外部の攻撃に対しては直ちに団結して取り組んだという郷吏層特有の結束力が作用したことが大きい。

農民戦争が終わった後、都統将の鄭錫珍は 1895 年 12 月に農民軍鎮圧功労で海南郡守に特除された[14]。これはわずか 2 年前に奸郷と見なされていた郷吏層が政府から国家の危機を

9 『錦城正義録』40 頁。詳細な内容は『錦城正義録』93 ～ 97 頁参照。
10 韓末の羅州地域の郷吏家の社会的ネットワークについては박진철「韓末 日帝下 羅州地域 郷吏家門의 動向」（『대동문화연구』44、2003）参照。
11 鄭錫珍「蘭破遺稿」122 頁。
12 「蘭坡遺稿」111 頁。
13 『錦城正義録』62 ～ 64 頁。
14 「蘭坡遺稿」152 頁。

救った功勲者として認められたことを意味した。東学農民戦争という危機は、羅州地域の郷吏層にとって地域社会における自らの地位を大きく強化する重要な契機になったのである。

（2）義兵と郷吏

甲午改革による地方制度および財政制度の変化は、羅州の郷吏層を圧迫した。このような状況の中で閔妃が殺害され断髪令が発せられると、全国各地で義兵蜂起の動きが現れ、羅州の士族や郷吏の間にも義兵蜂起の機運が高まった。

羅州は 1895 年 5 月の地方制度の改変によって牧から観察府にかわった。それに伴って 1895 年 5 月 29 日に初の観察使として韓耆東が就任したが、6 月 20 日に辞職し、6 月 19 日には安宗洙が参書官に任命されて 7 月 26 日に着任した。安宗洙は開化派官僚であった。

親日的官僚集団が推進していた甲午改革の地方制度および財政制度改革は、郷吏層の存立基盤を脅かすものであった。安宗洙は開化派の人物という点だけでも、羅州の士族や郷吏にとって排斥すべき対象になった。しかも彼は、赴任後の数カ月間、8 万両という巨額の金を集めたという風説が出回るほど、富戸に対してほしいままに略奪を繰り返した。その上、安宗洙が断髪令を強いると、羅州の士族や郷吏層は憤り始めた。

羅州義兵蜂起の直接的なきっかけをつくったのは奇宇萬であった。奇宇萬は 1896 年の旧正月に倡義計画を立て、1896 年 1 月末に彼の通文が羅州郷校に伝わった[15]。ところが、羅州郷吏層では奇宇萬の通文が届くはるか前、東学農民戦争当時に都統将として羅州を守り抜き手柄を立てた戸長の鄭錫珍によって、義兵蜂起の準備が整えられつつあった。3 月 21 日（旧暦 2 月 8 日）、再び湖南の 50 邑に送る奇宇萬の通文が長城の義所から羅州に届いた。羅州義兵は 3 月 22 日に安宗洙とともに削髪を主導した 3 人の官吏を殺害した[16]。羅州義兵の構成員のほとんどは両班の儒生や郷吏で、義兵将は士族の李鶴相であった。しかし、羅州の儒生による義兵蜂起を推進し、義陣が整えられないうちに参書官の安宗洙らを殺したのは郷吏層であった。羅州義兵の蜂起準備は外向きには郷校を中心に進められたが、当の倡義所が郷吏の執務所である椽吏庁に設置されたことから郷吏層が義兵を主導したことがわかる[17]。また、義兵に参加した郷吏は事実上東学農民戦争当時、守城軍の中心人物でもあった。ところが、政府から解散を慫慂される中、4 月 4 日に奇宇萬が羅州を離れ、8 日に宣諭使と親衛隊が派遣されると、解散し始める。4 月 23 日には羅州義兵の背後で糸を引いていた海南郡守の鄭錫珍が任地で逮捕され、羅州城外で梟首になった。4 月 12 日に前潭陽郡守の閔宗烈が全州監營兵隊によって羅州に押送されると、1896 年の羅州義兵は消滅した。守城の時とは異なり、郷吏側としてはかんばしい結果とはいえなかった。後期義兵蜂起に参加しなかったのもある一面ではこれと関連している。

1907 年以後、義兵が全国規模で蜂起すると、統監府は郡面単位の自衛団の結成を要求

15 『錦城正義録』병편、109 ～ 113 頁。
16 『錦城正義録』병편、121 ～ 124 頁。
17 『錦城正義録』병편、126 頁。